

氏名	大野 光子
学位の種類	博士(社会学)
報告番号	甲第440号
学位授与年月日	2016年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	東京のインナーシティにおける「多文化空間」形成に関する 社会学的研究 ——新宿区大久保における保育所と関わる事例を通して——
審査委員	(主査) 水上 徹男 野呂 芳明 西山 志保 大橋 健一 (立教大学大学院観光学研究科教授) 町村 敬志 (一橋大学大学院社会学研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

本論文は以下の8章(序章を除く)で構成されている。第1章「インナーシティに関する社会学的研究の系譜」で関連する先行研究を整理、第2章「インナーシティに関する近年の動向」では、これまでの研究を参照に事例分析のための枠組みの構築を行った。第3章「東京のインナーシティの現在——新宿、大久保を通して」では、対象地域となった新宿、大久保の「多文化空間」の様相などの特質を提示した。第4章「『多文化空間』新宿、大久保に生まれた保育のニーズ——24時間保育園『エイビイシイ保育園』を通して」では、現在認可の24時間保育を実施している「エイビイシイ保育園」の設立過程や利用者の特徴などを通して、都心回帰の担い手やそこでの多様な生活様式を明らかにした。第5章「『多文化空間』新宿、大久保における保育運動——エイビイシイ保育園の認可獲得運動を通して」で、本保育園がおこなった認可獲得のための運動を取り上げ、大久保の地域性との関連や認可獲得までの経緯などを詳述した。第6章「無認可の24時間保育園における子育ての実態」で、無認可の24時間保育所を通して、利用者の職業や母親の生活や子育ての内情などを描いた。第7章「『多文化空間』における保育所の利用者及び利用状況について——調査票調査の結果をもとに」では、新宿区内にある5つの保育所で調査票を配布して、合計115人のインフォーマントのデータ分析もとに、「多文化空間」における保育ニーズと課題について検討した。終章「現代の大都市東京のインナーシティの特徴——子育ての現場を通して」では、本調査を通して明らかになった現代の大都市東京のインナーシティに特徴的な生活様式を明らかにした。

(2) 論文の内容要旨

本研究は、現代の大都市東京のインナーシティの特性を分析することである。外国人住民が多いことで知られる新宿区の大久保地区を調査の対象地として、24時間保育を提供する保育所を拠点にフィールドワークを行い、保育所の協力を得て質問票調査を実施した。日本のインナーシティを調査対象とする社会学的研究は、1980年代後半以降はインナーシティに流入した外国人住民の生活世界を描いたものが多い。これらのいわゆる「都市エスニシティ研究」は、実証的に地域の変化をとらえてきた。しかし1980年代後半以降のエスニシティと関連した日本のインナーシティ研究は、エスニック以外の社会的多様性が中心課題にはならない。本研究では、インナーシティ大久保において、エスニック社会に関連する地域の多様性に加えて、インナーシティに住む新住民層などを含めて現代の東京のインナーシティを「多文化空間」と位置付け、その特徴を示した。

本研究のデータの収集は、インナーシティ新宿、大久保における保育や子育ての現場を通して行った。より具体的には、著者による大久保を拠点とした2012年からのフィ

ールドワークやインタビュー調査などによるデータ収集に加えて、新宿区内の保育所 5ヶ所に対しておこなったアンケート票調査の分析結果を提示した。事例の中心となる「エイビイシイ保育園」には、著者がボランティア・スタッフとして通い、保育者、保護者、地域住民や認可保育園となった際の行政担当者にもインタビューを行った。実際、保育所は人びとと地域社会を繋ぐ結節機関として機能する社会施設であるが、保育所はこれまでのインナーシティ研究の事例としては、あまり注目されてこなかった。しかし、子どものいる共働き夫婦にとって、保育所の獲得は重要な問題になり得る。

本研究の第 1 章では、インナーシティに関する社会学的研究の系譜を辿り、インナーシティがどのような空間として理解されてきたのかを確認した。シカゴ学派都市社会学の遷移地帯を対象とした研究や日本のスラムや盛り場、外国人住民を対象としたものなどを、インナーシティの枠組みで捉えた。第 2 章ではインナーシティにおける新たな動向として「多文化共生」や「トランスナショナリズム」の概念が関わることを指摘した。また、本研究における分析枠組みとして次の 5 つを設定した。(1)「盛り場」形成を中心としたインナーシティの地域史、(2) 人口動態の特性、(3) 多様性と流動性の分析、(4) 地域における「多文化共生」の取り組み、(5) 国境を越えた移住者の形成する社会空間、である。第 3 章ではインナーシティ大久保の現在の特徴を明らかにするため、上記の分析枠組みに沿って、大久保の今日の姿を描いた。

新宿は 1945 年の東京大空襲で焼け野原と化すが、同年から「歌舞伎町」の建設も始まり再び盛り場として発展を続けた。歌舞伎町に隣接している大久保は 1950 年代～1980 年代にかけて、歌舞伎町で働く人びとのベッドタウンとしての役割を果たしてきたが 1990 年以降、外国人住民の営むエスニック系施設が発展、近郊の地域からも自国の文化を求めて外国人住民が集まるようになった。現在外国人住民のみならず、日本人からも人気のある盛り場である。また 1990 年代末以降、ヤングアダルトの専門・技術的職業従事者、事務従事者、販売・サービス職従事者を中心的な担い手として人口の都心回帰が起きており、余暇活動だけではなく、生活の場としても人びとが集まっている。新たな住民としての都心回帰の担い手の定住は、エスニック・タウンとして知られるこの地域にさらなる多様性をもたらしていることを意味する。第 3 章以降は主に「多文化空間」の実例を通して、現代の大都市東京インナーシティの特徴を提示している。現在のインナーシティ新宿、大久保は、国境を越えた移住者の形成するマルチエスニックな社会空間と都心回帰のヤングアダルトなど、日本人住民の多様性も包摂しており、社会的多様性がこれまで以上に進行している。第 4 章では大久保の 24 時間保育を提供する認可保育園「エイビイシイ保育園」の設立過程や利用者の特徴などを提示した。1983 年に新宿の職安通りにあるビルの一室から始まった無認可の保育所だった。その後、2001 年に法人化されて東京都で初、当時唯一の 24 時間開所の認可保育園になった。この保育園を拠点として、「多文化空間」新宿、大久保における夜間保育のニーズの高さやこの地区の保育園を利用する女性の仕事や「子育て」に対する価値観に基づく生活様

式などを明らかにした。

第5章では、エイビイシイ保育園がおこなった認可獲得のための運動を詳述し、「多文化空間」大久保の地域性と関連してこの地で、認可の24時間保育園が実現した経緯を明らかにした。しかし、認可という制度化されたことによる成果と認可であるがゆえに、本保育園を利用できなくなった人々の存在などを例示した。そのため第6章では無認可の24時間保育園を取り上げた。エイビイシイ保育園のある新宿区内には、他にも24時間の保育園が複数存在するが、それらは全て無認可の保育所のため公的機関がその数や内容などの実態を把握していない。無認可の24時間体制の保育所「I保育園」の保育士や利用者にインタビュー調査を行い、無認可の24時間保育園における保育実態などを通して、この地区の保育ニーズを明らかにした。「多文化空間」の住人の職業構成の特徴は、都心回帰の担い手である専門・技術職層と販売・サービス職層が多いが、特に深夜、朝方までの利用者の職業は、飲食業を中心とするサービス業従事者となる。

「I保育園」の場合、サービス職に就く利用者という、それは、キャバクラのホステスやソープランドで働くシングルマザーが中心となる。風俗業で働くシングルマザーは、認可保育園の入園制度に適合しない人びとが多く含まれており、彼女たちは認可保育園には入園できない。第7章では、新宿区内にある保育所5ヶ所の調査票調査の結果を分析した。その結果、利用者の職業上の特徴と関連して、多様な保育時間のニーズに応えるために「24時間保育」が必要となることが確認できた。利用者の特徴としては、富裕層がその中核を成している一方で、シングルマザーや外国人住民の世帯年収の低さが顕著に示された。外国人住民やシングルマザーにとって、エイビイシイ保育園のような認可の24時間保育園の入園が適切であると考えられるが、同時に認可保育園はサービス職に就く外国人やシングルマザーの入園についてはハードルが高い。したがって、24時間保育のニーズが明らかである「多文化空間」においては、ニーズに合わせた保育サービスを提供する仕組みを構築する必要があるだろう。第8章で、本論文の結論を示した。本論文で調査対象地域とした新宿においても、1998年以降現在まで人口は増加を続けている。このような都心部における中高所得者層の人口増加は、ジェントリフィケーションとの関連もある。しかしながら、インナーシティ新宿、大久保では、ジェントリフィケーションを起因として、低所得者層が追い出されるような現象は、必ずしも見られない。このことは、本研究において主な事例として取り上げた認可の24時間保育園利用者が、多様な職種や階層、世帯形態、エスニシティで構成されているという事実からも観察できる。むしろ、大久保のもつ独特な地域性を要因として、多様な人びとが共存している状況を読み取ることができる。以上のように、新宿区大久保には、多様な背景の人々の働き方、子育て、家族の在り方や、それに伴う多様な価値観や生活様式があり、それら全てを包摂する「多文化空間」が成立している。本研究において、特徴付けた「多文化空間」としての大都市東京におけるインナーシティの特質は、多様な人びとが共存している／することのできる空間のことである。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本研究は社会学のなかでも、インナーシティ論の系譜として位置づけられる。異質な人々が集まる場としてのインナーシティについて、シカゴ社会学の古典的な解釈にはじまり、日本国内のインナーシティに関連した都市研究を時代の変化に基づき整理した。国内のインナーシティ論としては、奥井復太郎や磯村英一らの研究から近年までの動向を取り上げた。1980年代半ば以降は、エスニック集団の顕著な流入による主にインナーシティを舞台とした「都市エスニシティ」研究が盛んになってきた。本研究で取り上げた新宿区などは、東京を対象としたエスニシティ研究の中でも主要な対象となってきた。韓国の飲食店やスーパーから劇場まで並ぶコリアンタウンとしての様相から、中国・台湾、タイ、ネパール、インド出身者らが形成する店、近年のムスリムを中心としたビジネスの発展を含めて、多様なエスニック社会形成の中心地でもある。このようなエスニックによる異質性が顕著であり、社会学の調査対象としても注目されてきた。実際、新宿区は東京のインナーシティのなかで最も外国人住民数の比率の高い地区であり、その流動性も高い。2000年代半ばから、転入、転出が毎年約1万人を記録し、外国人全体の約3分の1が入れ替わっている。移住者を対象とする都市エスニシティ研究の中心地であるが、他方で大久保地区などのインナーシティでは、ヤングアダルトの専門・技術的職業従事者らによる、都心回帰も起きている。

大野氏は、2012年から大久保を拠点にフィールドワークを実施、インタビュー調査を積み上げてきた。そのなかでも「エイビイシイ保育園」ではボランティア・スタッフとして定期的に通い観察を続けた。また、在日コリアンの子どもの学習支援をおこなうボランティア団体「チャプチョ」においても継続的に、ボランティアとして関わってきた。エスノグラフィックなデータに加えて、保育施設の協力を得て228件の質問票を配布、115件の有効回収を経て本地域の保育所に子どもを預けている人々の生活情報を得た。本研究は保育所から地域の社会文化的多様性をみることで、エスニックに限定されない、むしろ顕著なエスニック・ビジネスが展開され、様々なエスニック集団が共存している中で、同時に進行してきた非外国人住民の多様な生活世界を含めて描き出すことができた。

(2) 論文の評価

本論文は、社会文化的多様性が進行しているインナーシティの状況について、保育所を通じたフィールドワークなどから把握したものであり、「多文化空間」と表現された都市社会の内実を示した。フィールドワークなどのデータ収集については、オリジナリティに富んでいることなど、高く評価された。エイビイシイ保育園の認可獲得のプロセ

スとその後、大野氏の複数年にわたるヒアリングが重なり、様々な人の視点から描いている点で鮮明な描写に結び付いた。また、インナーシティの研究を振り返って、都市エスニシティ研究としての傾向をどう乗り越えるのかという点に、この論文のひとつの学術的な貢献の可能性が示された。しかしながら、審査委員会や公聴会において、次のようないくつかの課題も提示された。上位概念を「多文化空間」とした際に、関連する概念（「多文化共生」や「トランスナショナル」など）の説明はされているものの、如何に結びついているかは必ずしも明確ではなかった。同様に、多様な社会的背景の人々がどのような関係性で「多文化空間」というものを構成しているのか、という分析は十分ではなかったのではないかと、という指摘があった。保育園にフォーカスするがゆえに、取り上げられなかった世界もあった。子育てを終えて、都心に回帰する老人世代などにも問題意識として持っていて良いのでは、という点も指摘された。住民層全体の広がりがあるなかで、ここで描いてきた層がどの部分にあたるか、また保育に関わるニーズの類型などについて、もう少し丁寧に論述できたのでは、という指摘もあった。

とくに評価された点としては、以下のことなどがあげられる。インナーシティで起きているジェントリフィケーションという現象を、低所得層などのマイノリティの「排除」ではなく、共生している大久保のインナーシティに注目している点に独自性を打ち出している。全体としては、本論文は「エスニック側からの分析を超えて」という視点があり、これがオリジナリティに繋がっている。1980年代から90年代初めにこの地域で外国人住民が増えた時、彼らにフォーカスを絞った調査が多くなり、優れた研究も沢山あるが、同時にマジョリティである日本人と別の「外国人の世界がある」という論調が主流となった。場合によってはエスニックが過剰に強調される研究もあるなかで、本研究は的確にその流れを乗り越えて、「エスニック側からの分析を超えて」という視点の提供でもあった。その結果として、結節的な機能を持つ施設としての保育所に着目したのは的確な分析だった。

公聴会は2016年7月15日に本学で開催され、大野氏から本論文についての紹介と説明があり、それを受ける形で審査委員、並びに公聴会に出席した社会学研究科所属の在学者、「エイビイシイ保育園」の園長先生、ボランティア団体「チャプチョ」スタッフ、「日韓合同事業研究会」代表からの質疑を受ける形で行なわれた。同氏の応答は、的確かつ明瞭であり、審査委員会は公聴会終了後の審査委員会において全会一致で同氏に対して合格の判定を行なった。